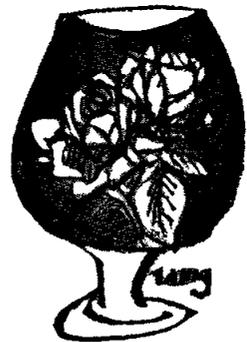


ニュージーランドの自然保護印象記



ニュージーランド(以下N・Z)の自然保護について、一九七九年に南島ウエストランド国立公園総合科学調査を完了したスタッフ主任P・ワールド氏は、その調査書の結びとして大変示唆に富んだ言葉を残している。

彼は、N・Zの国立公園法の文章を示しながら、自然への現在の対応に触れ、「国立公園そのものは、わずかな恩恵しか施さない。また、それ以上のことを知る由もない。しかし観光事業の経済的価値を測ることはできる。また、この人里離れた寂しい場所や土地の光景、そこに生きる動・植物に対する興味、地球年史の結果として存在する岩石などについて科学者の研究活動への真価も認めることができる。」

ウェリントン市海岸崖地のベニカノコソウの群生化



人間が環境適応の生物界第一人者であることを認め得ても、果してそれは自然というものの側から見て真に偉大であり、重要な価値をもつものかどうかは判断の外にある。国立公園は、保護地固有の他に比較できない生命の決算としての

存在があり、自然科学上その地の過去から継続されている生物界の交錯のプロセスで成り立ち、人間や人間の科学・技術からの拘束はない。そこでは、生物は彼らの進化のコースが変るまで生き残ることができる。しかし、地形・地質の構造と構成上、風蝕作用や植物などによって、敵存する水河の及ぼす力と共に変化の跡をたどるのは当然である。

南ウエストランドのような人跡未踏の秘境においてさえ、そこに人間との係わり合いが生じ、進むに従い、鳥たちの死滅(モアヒダ鳥の一種でポリネシア人の漂着以来食糧として捕獲、三〇〇年前に、この地に棲んでいたワシの一種と共に絶滅させられたことを指す)を防げず、持ちこんだ動物たち(ジャモア、シカ、ヒマラヤヤマネ、野ウサギ、フロネズミ……等)から植生保護に立ち向かわざるを得ない現状に到っているが、同時に人間の経済的な御都合主義による原罪を問われるという結果にもなっている。中略。P・ワールド氏が、特に強調していることはいま、その一部の紹介でも判るように、移入動物の野生化による被害の大きさと、低地における森林伐採の結果植生遷移の変化を警告している。

たしかに現在、国立公園法がより地域の指定拡大と野生化した移入動物をハンターや空からの狩りよによって、数の制ぎよをしたり、牧場として数カ所に集めたりはしているが、シカなどは低山帯森林に集中し、下草と稚樹に相変らずの被害を及ぼしているようである。

現地のレストラン諸氏の話を経合してみると移入動物について、商売ハンターは食

ウィルトン・ヒルのハリエニシダ



肉としては利用できず、数が多いことから狩りよりの魅力がなくなったこと。シカ、シヤモア、タールなどの飼育のやっかいなことから敬遠され、効果がさっぱりであることなどが語られたが、N・Z政府は、さらに移入動物駆除の目的を達するためにハンティングの方法や、地域の範囲についても制限緩和を計っているようであるが、その数の増大と被害はますます加えているというのである。

法令の対称外になっているフクロネズミ・オポッサム（ポリネシア人の漂着以来本島に棲みつき、中・小の樹木の新芽や若枝に与える被害はシカ類に匹敵することである。）は、農場を繁殖基地として増加の一途をたどり、打つ手なしというのである。

一方において、人々の手によって自然植生の衰亡を食い止める大きな政策・施策を確立し、永久にそれらを原始の状態に保護されなければならないとする積極的な意見をもつ科学者の数も、決して少ないわけではない。南島のみならず、北島においても国立公園法の強化は一九七九年四月に施行されて政府も本腰を上げて、科学者を中心に推進開始の段階に入っているようである。

ウエストランド国立公園を例にあげると木材切出すことから低地の森林保護を存続することによって伐採停止という手段を講じ、サザン・アルプスの自然植生を維持することのため、ワイククバ・ステート・フォレストの地帯も保護地として加え、*Dacrydium Cupressinum* の高台純林地や *Podocarpus dacrydioides*（氷河期残存種）の今後の維持保護を図り、現在絶滅寸前にあるこれらを存続させていこうということになっている。

私のN・Zの植生調査研究は、一九七五—七六年と、今回八〇—八一年の二回で、その六年間を経た今日のN・Zは大きく変わったことを指摘することができる。

その第一にあげられるのは、この国が観光開発事業に大きなウエイトをかけた結果として、南北両島に指定されている国立公園地帯には、かなりの収容人員を見込んで、ホテル、ロッジランド、キャンプグラウンド及び付属設備を含む近代的な新しい施設。

また、それらの施設の環境として森林の一部切り開き、芝生を造成し、外来種の花、樹など植えられて、いわゆるヨーロッパ風の外観をも呈するに到ったところもある。

こうした観光地には必ずといってよく、レインジャー・センターがあり、公園の管理のみならず、公園に関する動・植物の紹介のパンフレット、公園案内書、特に地質学の展示室に力点がおかれた博物館としての役割をも兼ねたセンターで、付属的ではあるが地域植物の主なものを集めたロックガーデンをもつところもあった。

さらに、レインジャーの中に植物研究者のいるところでは、立派な植物標本がよく整理され（南島ワナカレイクセンター、北島トンガリロ国立公園センター）、私の研究に大きな恩恵を与えてくれたところもある。

いざにして、N・Zの観光開発事業の近代化と進行によって六年前とは比較にならない整備がなされ、また、それは旅行者にとって快適な旅への誘いとなっていて、この事業の成果があがっているのは事実であろう。

同時に、これらの施設環境を基地として、公園内に外来種が異常とも思えるほど、優占種に代りつつあることは、今後の問題点になってくるであろう。一例として、マウン・ト・クック国立公園のグレンコユ・ロッジ周辺のルビナス小群落は在来種を駆逐し、その群落範囲はますます拡大しつつありの典型的な様相である。

観光開発と道路整備や、主な地点での休けい施設も前者と同様で、食堂とバーを兼ねた建物は広い地積をもって、バス会社との提携事業となっている。日本では考えられないほどの広い庭はよく刈りこまれた芝生で、公園内にあるヒービー（ゴマノハグサ科）などの花木を配しているのはごく最近の施設ということである。

人口が日本の五分の一弱で、牧畜を主産業とするこの国の国民性は、大らかで、親切で包容性があり、そのことが同時に自然に対する考え方の基調にもなっているようである。

先住民のマオリ人が自然に与えた所業（モアの絶滅、山嶽地の火災など）について

ルピナス、エニシダの野生化



も寛大で、過去を深く追求することは余りないので、歴史的事実として平穩に収めているふしが見られる。

また、ヨーロッパ文明の持ち込みもイギリス人の特性がよく現われていて、家屋や庭の構造など、古い年代のものなどは本国そのままの様式が保たれ、北海道の開拓当時のわれわれ先代の人々と軌を一にするもので、国が変わっても人間の故国や故郷に対する執着には国境はないようである。

ヨーロッパ系のN・Zの人々は、花を愛する。ヨーロッパや南アフリカ、あるいはオーストラリアなどの美しい花、花木を庭に植え、公園を飾る。それらの花々が庭先から路傍へ、牧場へと拡散し、群生化が進み、ウエリントン市の海岸砂地の *Demophilus* *ca.*, *Mesimbranthemum*, *Aster novaeangliae*, *Disphyma australe* や、崖斜面を埋めつくす *Conrathus robur* の淡紅色の花などは一層群集化し、それなりの美観を添えている。

ウエリントン市から東南約8kmのところにウエリントンヒル(標高800m)がある。

もともと牧場地帯で、その丘陵下にオタリ自然植物園があつて、私にとつてはN・Zの植物知識を得る最適の場として学習園として利用させていただいた恩恵も受けているエリアであるが、ウエリントン市から歩いてこの丘を達したとき、前回は緑豊かな牧草地であつたものが、このたびはその半分に近い地積が黄色花に塗り変えられていたのである。

黄色の侵略者は、ハリエニシダ(マメ科)

Dilox eurypaeus でこれは一八〇〇年代に渡航した人々の手でヨーロッパを偲ぶ花として庭に植えたものの現在の姿である。この植物にトゲのあることから、一部は羊や牛から野菜を守るための生垣としても利用

したということでもある。

繁殖力が旺盛で、やがてバラ線代りにも利用したということであるから、この丘の塗り替えにわずか六年の歳月よりかからなかつたものであろう。

この現象は、私の歩いた都市周辺の現象としては珍しいことではなく、土地所有者まかせであるのが実態のようである。

オタリ自然植物園長R・H・モレー氏に「対策を講じていますか」という私の質問に「わずかな職員で園内侵入を防ぐのが精一ぱいです」という答えが返ってくるほど猛烈な侵略者である。

この姿は、日本の中国地方の休耕田として長く続いたところのセイタカアワダチソウの繁茂に似た風景を連想させられた。牧場主に会っていないので、この不法占拠に近い状態に手を拱いているのかという疑問も残ったが、羊牧業が、化せんのおおりに受け、本国イギリスせん維工業の不振と共鳴した中で、黄色い地面は投げ出された土地との印象を受けた。

南島サザン・アルプスは、マウント・クック(二、七六〇mを主峰として、西側タズマニア海から三十数kmをほぼ南北に走り、その西側は多いところで雨量年一万mmに達する多雨地帯であるが、東側のすそ野にあたる丘陵地は雨量が年五〇〇〇mmに達しないところはかなりの面積に及ぶ。特に夏季の乾燥期には、草地としての利用価値のない地帯も出現する。このようなことからN・Z政府は乾燥地の解消に向けて徐々にではあるが湖の落差を利用したダムと灌漑用水の開発を進めているようである。

水利開発のプランについて訊ねる機会もなかったので憶測は避けるが、私の観たままの状態を述べると、マウント・クック国立公園内のテカポ湖は、プカキ湖と共に、その湖水の色の美しさは格別で、テカポ湖はゴッドレイ、マアカウレイ二河川が水堆石を川床としての流れをためた湖で透明なエメラルド色であり、プカキ湖はホッカー、タズマン、マチソンなどの水河の流れの水をたたえた真珠色の湖で初めて接した時の感動が、出会うたびに深まっていく美しさである。

晴れた日にはサザンアルプス連山の白い姿を映し、曇った日もその色を失わず、愁いをこめた色彩にデリケートな変化を見せる……そのような美しい光彩をもつ。ところがテカポ湖は現在、その東側に運河を開き、車道から湖水を臨むことができなくなっ

ていたことに失望させられた。

バスの運転手に、なぜこのような造り方をしたのかたずねても、わからないという。将来は変わるのかも知れないが、国立公園内ダム運河工事にはいささかお粗末な造成で、その工事も湖の岸辺を掘りすんで幅五m(目測)、深さ?の運河ができたという、その湖や背後の山岳の風景の眺望が素晴らしい景観であるばかりに無様な姿として眼に映ったのは、独り私だけであつたらうか(来たる一月、私の最終調査で訪れるので確かめてみたいと思っている)。

もし、私の皮相的な観方でN・Z政府が、湖や湖畔の植生保護を念頭においた施工であつたのなら、それなりの敬意を表したいと考えている。

N・Zの国立公園を訪れてそれぞれの特色をもち、対応がなされていることは前にも断片的に触れたが、自然保護の徹底したところとしては、北島のエグモント国立公園であらうか。わずかに二五・一八mの日本の富士山に似た山容をもち、植物学的にも興味深い植相をもつ山として世界的にも知られている。自然保護が徹底していると観た私なりの数えあげた条件は、登山者のための仮眠施設が三方所よりないこと、レジャーとしては、かなり体力を必要とするコースが設定され、車で山腹に達するには、ニュー・ブリマスマ市からおよそ四、五十分のところ、マナイア路からダウンソン・フォールズロッジへのもの(ここには公園案内センターがあり、エグモントの地学的展示模型は素晴らしい)、ペンブロッック路からストラトフォードの山小屋へのもの、エグモント路からノース・エグモント・シャレーに到るもので、他は山麓で車を捨てての登山路となつている。

このように制限つきの入山路が維持されている限り、また、人々の安易に大挙して入らない限り、この公園の生態系は存続され、世界的な価値をもつ独立植物系区は乱されることはないであらう。

いずれの国においても、自然保護と産業立地の関係に矛盾や、相剋的なもの生ずること、近代科学や工学の及ぼす影響といったものが先進国であれば、環境汚染や開発による被害を与えているがN・Zについては、この国の産業構造、人口と土地のパラメータ、気候風土や地球上に位置する地質成因の歴史など、まだまだ処女地としての要素を十分に包蔵し、生物学上から見ても、いまままで述べたような問題点はあつても同じ島国でありながら、日本の現実とは遠くかけ離れている諸条件の中の、若干の事実を拾っ

てみたにすぎない。

一九六〇年代末より、この国の自然科学者による個々に或は大学の研究グループなどで進められていたそれぞれの研究成果を各国立公園ごとに、地質、気象、動物、植物の各分野にわたって総合的に調査解明に当り、それぞれの報告書がまとめられたが、その報告書の中に示された過去から現状認知の關係から、将来への提案をなされたのは、わずかに最初に引用した、P・ワールド氏だけであつたことに、私なりにいささか物足りなさを憶えた。

これらの報告書は、N・Z政府のきも入りで完成されたいささつや、趣旨として観光開発アピールの一環として国立公園の自然科学的現状の紹介という点にスポットを当てたということのようである。

私のN・Zにおける水河帯植生調査にお世話になつた方々の中にも、将来の問題点について、自然保護という概念が現状保全という認識が先立って、未来への展望が討議されたり、科学的に追求するシステム化までには到らないということを案ずる気運が進んでいくことが感じられた。

ぶつつけ合う問題点が衝撃的でなく、極めて微温的であり、緩慢さがあるためのお国柄と片づけてよいものかどうか。

(カナダ・ラングレイ農大客員)